

<研究ノート>

E. F. フレイジアの逸脱論

西 川 知 亨

1 はじめに

エドワード・フランクリン・フレイジア（1894-1962）は、「黒人」⁽¹⁾として初めてアメリカ社会学会⁽²⁾の会長（1948）に選任された人物である⁽³⁾。彼は、シカゴ学派の「黄金時代（the Golden Age）」、つまりパークやバージェスといった巨匠たちが指導をおこなっていた時代にシカゴ大学で博士号を取得している。その博士号取得の翌年、博士論文のタイトルと同名の著作、『シカゴの黒人家族』（1932）が出版された⁽⁴⁾。この著作は「シカゴ学派」のエッセンスで詰まっており、エドワーズも指摘しているように、フレイジアが「シカゴ学派」に社会化されていた様子をうかがい知ることができる（Edwards 1968：xii）。フレイジアの関心は主に、「人種と文化接触（Race and Culture Contacts）」と「家族（Family）」にあったと言われている（Odum 1951=1955：345-6; Edwards 1968：vii-viii）。フレイジアは、「黒人」社会学者として、黒人の「逸脱」行為ないし現象に対して果敢に挑戦していった。たとえば、黒人の「少年非行」、「家族遺棄」、「私生児」といった現象である⁽⁵⁾。犯罪学理論を概観しているモイヤーも指摘するように、フレイジアは社会学にも犯罪学にも多くの重要な功績を残している（Moyer 2001：108）。

ただし「黒人」の有識者ということから、フレイジアに黒人の「解放」を目指した指導

⁽¹⁾ 現在、いわゆる「学術」の世界では「アフリカ系アメリカ人」と呼ばれることが多いが、本稿ではフレイジアにならい、「黒人」と呼称する。

⁽²⁾ アメリカ社会学会の当時の名称は「American Sociological Society」だった。現在の名称は「American Sociological Association」である。

⁽³⁾ フレイジアの詳しい経歴については、Odum（1950）、Edwards（1968, 1974）、Platt（1991）、American National Biography（1999）等を参照。

⁽⁴⁾ 『シカゴの黒人家族』の詳しい紹介については、中野・西川（2002, 2003）を参照。

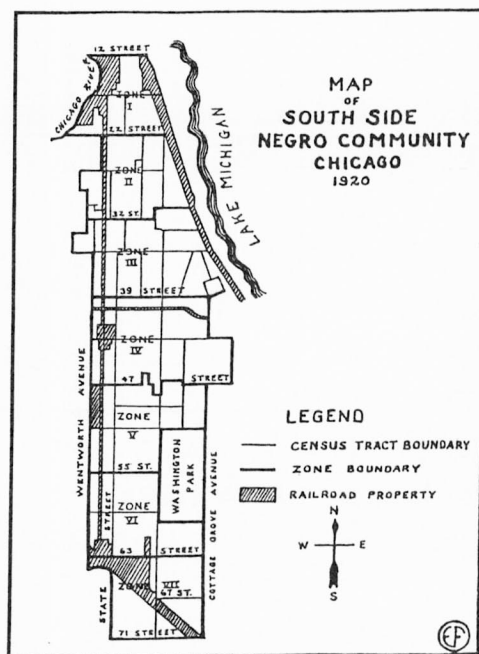
⁽⁵⁾ フレイジアは「家族遺棄」、「私生児」などを「逸脱」現象としてとらえると同時に（「逸脱」というタームは用いていないが）、社会解体ないし家族解体の指標として用いているため、あえてこの訳語を選定した。

者像を思い描けば、それは全くの期待はずれに終わる。実際には、フレイジアの「逸脱論」は、「黒人」の研究者にしては保守志向であると言える。たしかにフレイジアは人種関係の問題に取り組んだ。しかし彼は、単なる社会問題的なアプローチとか、「社会改良主義」的なアプローチをとることは拒絶している。フレイジアは次のように述べている。

私は何よりも自分を一人の研究者だと思っている。私は自分を黒人の指導者とか、人種関係の指導者だとは思っていない。私は教育のある大概の黒人の道程に横たわる陥穽（かんせい）と思われるもの、すなわち黒人たちの指導者たる役割を果たさざるを得ないようにされることを、極力さけてきた。一般にこうしたことは、それでなければ知的業績をあげるために捧げられたような多くの精力を使うだけでなく、黒人についての知的見解をせまくし、ときには知的歪みをも助長するようになるのである。自然なことではあるが、私の教育上と研究上の業績の結果として、私は大学において、そしておそらくはもっとひろく教育界においても、ある知的指導性を発揮していると思っている。(Odum 1951=1955: 346)

こうした彼の見解の背後には、フレイジアがその多くに依拠している、シカゴ学派黄金時代の巨匠・パークの影響を見て取ることができる。つまり、シカゴ学派の第二世代のパークらによって標榜された「科学主義」への信仰が見られる。フレイジア自身、パークは「社会問題 (social problems) からのアプローチではなく、科学としての社会学的アプローチを取っていたと信じていたのである (Edwards 1974: 111)。

本稿は、フレイジアが1920年代の「シカゴサウスサイド黒人コミュニティ」で見られた「逸脱」について描いている様子を、再構成しながら考察していく（地図1）⁽⁶⁾。フレイジアは、シカゴサウスサイド黒人コ



(Frazier 1932: 99)

地図1 1920年シカゴサウスサイド黒人コミュニティの地図

⁽⁶⁾ フレイジアによればこの「シカゴサウスサイド黒人コミュニティ」が分析対象として適切であるのは、ここに黒人のなかでの文化、生活、経済状況の違いのエッセンスが詰め込まれているからであるという (Frazier 1932: 66)。

コミュニティを扱った『シカゴの黒人家族』（1932）について、「本書のアプローチは、主に3つの点（factors）がかかわっている。生態学的なもの、社会心理学的なもの、そして社会的組織（化）と社会的コントロールの研究である」（Frazier 1932：256）と述べている。この言葉を手がかりにして、フレイジアの人間生態学、社会的組織化、社会心理学の視点が逸脱研究にどのように生かされているのかを見ていきたい。これらの視点は、初期シカゴ学派の重要な調査方法ないし理論である。さらに、フレイジアは、その後、サザランド（Edwin H. Sutherland）らによって「文化学習論」として知られるようになる視点も用いている。それゆえ、フレイジアの文化学習論の視点も考察することが有益であると考えられる。これら人間生態学、社会的組織化、社会心理学、文化学習論の各視点はお互いに密接にかかわっているのだが、それぞれの視点の特徴を見ていけば、「逸脱論」の流れのなかでフレイジアの議論を位置づけることが可能になる。それにより、人間生態学と個人的ドキュメントの方法が、逸脱への理論的視点へ生かされていく様子を知ることが出来る。さらに、そのようなフレイジアの「逸脱論」を通して、黒人社会学者であるフレイジアの研究に対する姿勢を多少なりとも知ることが出来るであろう。

2 人間生態学—— ショウからフレイジアへ

それではフレイジアが一つの重要な基礎にしている人間生態学の方法について考察していこう。

フレイジアは終始、社会とはたんにばらばらの原子が寄り集まったものではなく、一つの有機体であるという考えを持ちつづけていたと言われる（Edwards 1980：118）。この考え自体はそれほど特徴的ではないが、彼の人間生態学の方法には、この有機体の考え方がよくあらわれている。そしてこの人間生態学の方法は、フレイジアの理論的枠組のなかで、最も特筆すべきものであると言える。社会調査法の歴史を概観したイーストホープによれば、人間生態学の方法は初期シカゴ学派の「スラッシャー、ゾーボー、ショウという3人の調査研究者によって展開され」、「これら3人のそれぞれが、パークやバージェスによってつくり出された理論的概念を一層精緻なものとし、それに経験的証明を与えたと言える」という（Easthope 1974=1982：77）。1940年にクインが人間生態学的方法を用いた著作を分類して見せたように（Quinn 1940）、人間生態学は多様な特質を持ってきた。多様な特質を大まかにまとめれば、「自然地域」の研究と、時間的側面、空間的側面である。ここでは、自然地域における空間的側面について主に焦点を当てて見てみよう⁽⁷⁾。

「シカゴサウスサイド黒人コミュニティ」は、奴隷解放以降、南部からの黒人大衆が移

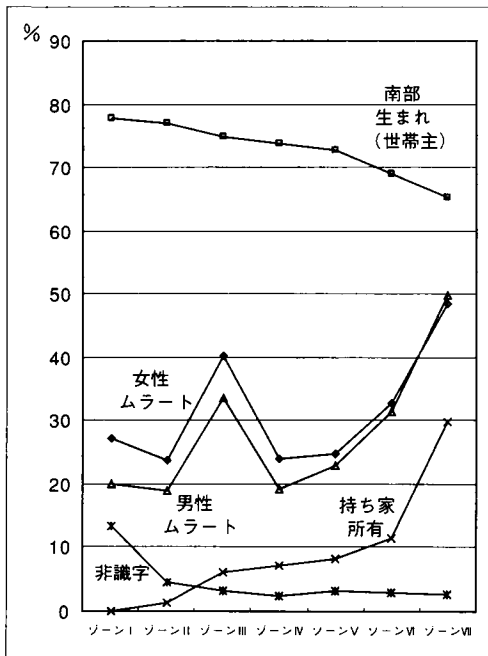
住してきた結果出来上がったコミュニティである。このコミュニティをフレイジアは「自然地域」としてとらえる。パークの定義にもあるように (Park 1929=1986:22)、自然地域とは社会的な計画によらずに形成された地域のことである。フレイジアが随所で強調するように、このコミュニティ内は決して均質ではなかった。この黒人コミュニティの内部では、職業、教養、志などが同じようなレベルにある人がそれぞれ凝離 (segregate) して生活していた。ここでは、選択 (selection) のプロセスが起っていたのである。より果敢で志やエネルギーに満ちている人は、第二次移民定住地域 (the area of the second immigrant settlement) か、もしくは外国からの移民も混じっているコスモポリタン地域に移動していった。しかしながら、人種の違いからこの黒人移動のプロセスには大きな抵抗がともなった。そのため、1920年には黒人人口の大多数がサウスサイドに広がる地域に居住するようになった。この意味でも、社会計画的でない、「自然地域」である。シカゴにやってきた他の移民集団と同じく、黒人集団は都市の中心部に足がかりを獲得した。なぜなら、このような都市の中心部はよそ者が入ってきてもあまり抵抗が起らないのである。そして黒人人口は、家賃が安い、中央ビジネス地区の周囲の退廃地区に集中した。この地区から黒人人口はレイクストリートに沿って西に広がり、ステイトストリートに沿って南に広がっていた。

この自然地域としての「シカゴサウスサイド黒人コミュニティ」を、フレイジアは7つのゾーンに分けて分析する。人間生態学の研究者のクインは、「都市構造の最も特記すべき仮説は、都市を5つの同心円ゾーンによって組織化されたものと見なす、バージェスのゾーンごとの仮説である」と述べている (Quinn 1940:197)。そのバージェス自身は、フレイジアの『シカゴの黒人家族』の序文で、次のように書いている。「この研究が果たした貢献で、おそらく最も多くの注目をあび、もっとも実践的な重要性を持っている点は、シカゴのそれぞれの黒人の定住ゾーンを、家族の組織化の相違に対応させて区別しているところにある」(Burgess 1932:xi)。フレイジアは、『シカゴの黒人家族』のなかでは、自然地域たるシカゴサウスサイド黒人コミュニティを、5つのゾーンでなくて7つのゾーンに分けて考察している (Frazier 1932:97-109)。この7つのゾーン分割は、1920年の国勢調査をもとにしている。各ゾーンはそれぞれ南北約一マイル (約1609メートル) だが、国勢調査の区画域がもとになっているため、必ずしも等間隔ではない。

(7) グレーザーも指摘するように、シカゴ学派における時間の考え方も重要である (Glazer 1966: xv)。フレイジアの逸脱論のなかにも、生活の解体と再組織化、流動などに時間の概念が見られる。ただしこの時間の側面にかんしては、ここでは詳しくは取り扱わない。なお、人間生態学の方法における自然地域の概念、時間的側面、空間的側面をフレイジアの著作ほど総合的に用いたモノグラフは非常に珍しい。このことは、フレイジアの著作において人間生態学的方法が一つの結実を見たことを意味している。

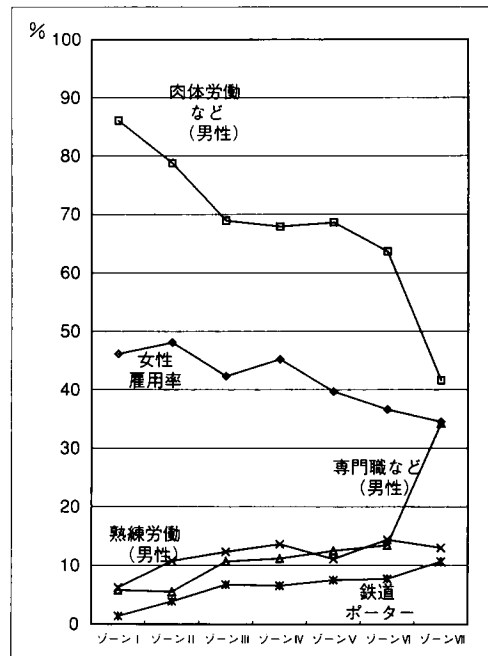
このゾーン分析は、コミュニティ内部で起こっている分化の様子を適切にとらえるためにおこなったものであるといえる。その様子は、「グラジエント (gradient)」によってあらわされる。「グラジエント」とは、「優占 (dominance)」の中心から離れるにしたがって、とある現象がだんだんと減ったり、逆にだんだんと増えたりすることを意味している (Quinn 1940: 198)。都市中心部に近い第一ゾーンから、最南端の第七ゾーンに向かって見ていくと、例えば、ムラート (混血) の占める割合、専門職に就いている人の割合、持ち家所有率は増加していく一方で、南部生まれの人の割合、非識字率、犯罪率、「私生児」の割合、非行率は減少していく (図1・図2・図3)。

このような手法を、フレイジアは逸脱研究に生かしていく。そしてフレイジアがシカゴ学派の非行研究のパイオニア、C. R. ショウの方法を踏襲していることは、フレイジアがショウの引用をおこなっている箇所からも明らかである (Frazier 1932: 204-6)。他の都市と同様に、シカゴの黒人の非行者数が増加していることにかんして、フレイジアはショウから次のような引用をおこなっている。「白人のプロテスタント、彼らのほとんどは現地生まれなのだが、シカゴが拡大していくプロセスのなかで、次第に非行率が高い退廃地域から逃れるようにして移動を続けている。一方、黒人は、経済的地位が低いために、『ループ』の近くの退廃地域に移住を続ける傾向にある。それゆえ、この地域に多く住む



(Frazier 1932: 100, 127)

図1 黒人人口の特性など



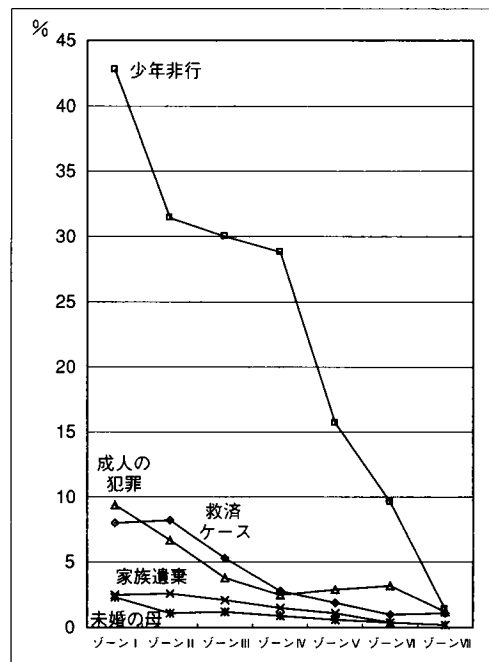
(Frazier 1932: 107)

図2 黒人住民の職業など

白人プロテスタントとかなり入れ替わった。裁判所に持ち込まれた黒人ケースの割合が増加しているのは、ある程度はこの人種集団が住むことを強いられている地域のタイプのためであるといえるだろう」。非常に多くの黒人大衆が都市で最初の足がかりを得たループの近くは、「(人種) 構成が目に見えて変化したという事実があるにもかかわらず」(ショウ)、30年にもわたって非行率が高いのが特徴であったのである。つまりショウは非行の背景として、人種ではなくその地域の特性を重要視しているのである。この考えは、アメリカ黒人にはアフリカ時代の影響はないと考えるパークの考えと一致している (cf. Edwards 1974 : 111)。

さらにショウの非行研究は、黒人コミュニティを様々な地区ごとに見ていくと、かなりの違いがあるということを示していた (Frazier 1932 : 206-9)。ショウは、ループから放射状に広がる幹線にそって、一マイルごとの非行率の計算を行った。そのなかでショウは、黒人大衆が住んでいる地域を通して、放射状の通りにそって非行率が減少していく様子は、他の人種の場合と似通っていることを見いだしたのである。フレイジアも脚注で述べているように、たしかにショウは黒人の非行率を計算したわけではないが、ステイトストリートに沿った非行率は、主に黒人の非行率を表していると言える。シカゴサウスサイド黒人コミュニティを分析対象に据えるフレイジアは、7つのゾーンごとの黒人ケースの割合を計算していく。すると、生活保護(救済ケース)、遺棄、私生児、その他家族ないし社会的な解体の指標のケースで見られたのと同様に、やはり非行率の場合にもかなり違いがあらわれた。さらに、南へ行くにしたがって少年の非行率が減少していく事実は、成人の犯罪率の減少と並行していたのである。

この人間生態学の方法は、フレイジアの研究において一つの重要な基礎をなしている。ただし、フレイジア自身も認めているように、人間生態学の方法だけでは限界がある。フレイジア自身も述べているように、人間生態学の方法は社会現象を説明するものというよりも、人口の中での「要素」の「選択と凝離 (selection and segregation)」のプロセスを示唆するものである (Frazier 1968 : 137)。フレイジアは、「生態学的研究は社会学的



(Frazier 1932 : 152, 189, 210)

図3 社会解体の種々の指標

研究にとって代わるものではなくて、人間の社会生活の補足的な研究である」と述べている (Frazier 1968 : 137)。こうしたことから彼は、社会現象を理解するためには、人間生態学による考察だけでなく、社会組織、コミュニティの文化、そしてコミュニティで暮らす人々の態度も経験的に調査することが必要であると考えたのである。こうして彼は個人的ドキュメントの方法などを中心とした質的な調査もおこなっていくのである。ただし、その場合でも、人間生態学の視点が一つの基礎にあることを念頭に置いておく必要がある。たとえば人間生態学の視点で明らかになった空間的な「分化」の様子に対応して、ドキュメントの提示がなされていくのである。

それでは、人間生態学的方法を一つの基礎にした個人的ドキュメントの方法がどのように用いられているかに注意しながら、「社会解体・組織化と社会的コントロール」、「社会心理学」、「文化学習論」の各側面について考察していくことにしよう。

3 社会解体・組織化と社会的コントロール

デュルケムに一つの端を発するコントロール理論によれば、慣習的社会秩序への絆が弱まったり崩壊したりすると、人々は「解放」されて犯罪に走るようになるという (cf. LaFree 1998=2002 : 96)。デュルケムは、有名な『自殺論』のなかで、「所属集団が弱まるほど人はその集団に頼らなくなり、その結果自分自身だけに頼ることになり、自分の私的関心に基づくもの以外の行動規則を認知しなくなる」と述べている (Durkheim [1897] 1952 : 209)。

このようなデュルケムの考え方を、初期シカゴ学派の研究者たちは「社会解体論」として受け入れていく。トマスとズナニエツキは『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』第二巻のなかで、社会解体を「既存の社会的な行動ルールが個々の集団の成員に及ぼす影響力の減退」と定義している (Thomas & Znaniecki [1918-20] 1974 : 1128)。フレイジアは、奴隷解放後の黒人家族の生活解体と再組織化のプロセスを描いている。黒人家族の生活解体の多くは、その地域の社会解体と密接に関連していた。フレイジアは、解体した黒人家族が、再生 (renewal) へのプロセスをたどっていくことについて、バージェスから次のような引用をおこなっている。「解体が再組織化へと向かい、より効果的な適応 (adjustment) を生み出している限り、解体は病的なものではなく、正常なものとして考えられなくてはならない」 (Frazier 1932 : 84=Burgess 1925 : 54=1972 : 56)。

それでは黒人家族に及ぼすコントロールを喪失していた様子を、フレイジアの著作から見えていこう。

退廃地域

統計的手法をもちいた人間生態学の視点によれば、様々な種の逸脱がとくに多く見られたのは、第一ゾーン、第二ゾーンという都市中心部に近い地域であった。それでは、第一ゾーン、第二ゾーンといった「退廃地域」の様子は一体どのようなものであったのだろうか (Frazier 1932 : 126-3, 150-2)。

すでに見たように、南部からの移民黒人が最初にシカゴでの足がかりを得たのは、都市中心部であった。つまり、ループの近くの第一ゾーンである。このゾーンには、南部からやってきた貧しい移民家族が多く住んでいた。そして黒人たちが住んでいた家は、黒人が住む家の中でも最も条件の悪い家であった。しかも、自分の持ち家に住んでいる黒人は皆無であった。

そして1920年以降、だんだんと産業と工業がこの地域に侵食してきた。それにともなうて、多くの黒人たちは南方への移動を余儀なくされ、第二ゾーンへと侵入していった。第二ゾーンは、ミシガン、インディアナ、プレーリーアベニューといった、かつてはファッショナブルな住居ストリートがあったところである。そこでは白人たちが、大きくて、立派で、華やかな住まいに住んでいた。だが、貧しい黒人たちが第一ゾーンから侵入してくるにともない、何百ものみすぼらしい家が、白人たちの立派な家を取り囲んでいった。そして、ワバッシュ通りに沿ったところには極度に退廃している地区があった。荒廃した家には家賃15セントないし20セントのベッド付きの部屋の掲示がかかげられ、空家にはポスターが貼られたままになっていた。捨てられた建物の間にはここかしこに自動車トラックの売り場もあった。その様子は、この地域が変容して退廃していくことを示していた。ちなみに退廃がもっと目についたのはステイトストリートにそった地区であった。たしかに産業はここかしこに勃興しており、「秩序と再生」は約束されているように見えなくもなかった。だが、この地区はやはり退廃していた。黒人のビリヤード場、靴磨きの「店 (parlors)」、料理店、がらくた屋、退廃した空きビル、安いユダヤ人の衣料店、新鮮とはいえない肉を売る市場があった。そして汚かったのはストリートばかりでなく、ここに立ち並ぶ黒人たちの家のなかもかなり汚かった。寝るためのベッドすらかなり汚れていて、しかも人がいっぱいでありかなり込み入っていた。だが、窓もかなり汚れていたため、そんな様子を外からのぞき見ることはできなかった。

家族遺棄や私生児、さらに少年非行や成人の犯罪が多かったのはこのような地域である。

流動性

さらに、フレイジアは、退廃地区で私生児や少年非行が多かったことの背景の一つとして、黒人たちの移動の激しさを挙げている。当時、黒人移民は絶えず移動を続けていたが、特にこの退廃地区では流動が激しかった。なぜなら、少しでも経済的余裕のある黒人は、この退廃地域から逃れようとしたからである。

フレイジアは、私生児を産んだ多くの女性が住んでいた地区は、流動がとても激しかったことを指摘する (Frazier 1932: 194-6)。このことは、彼女らにシカゴで住んだことのある場所を挙げていってもらうことで明らかになった。つまり、非常にその場所が多いのである。ある未婚の母親は、シカゴに6年間住んでいた。何度も引っ越していたのだが、何とか思い出すことができたのは次の場所だけであった。「29番ディアボーンストリート (Dearborn Street)、アルダインスクエア (Aldine Square)、41番サウスパークウェイ (South Parkway)、48番ヴィンチネス (Vincennes)、60番ステイト (State)、47番ワッシュ (Wabash)、49番ディアボーン (Dearborn)、115番キンズングトン (Kinzington)」。

フレイジアによれば、黒人大衆にとって、このように流動が激しかったことは、安定した生活を送る上で妨げになったのだという。

親の権威の喪失

南部の田舎のコミュニティでは、親の権威がよく保たれていた。だが、多くの家族遺棄のケースのように、シカゴではそのような権威は往々にして失墜していた。2年間自分の家族を遺棄したある労働者は、彼の家での権威を取り戻すために家庭裁判所に助けを求めたのである (Frazier 1932: 170-1)。

フレイジアによれば、黒人少女たちの乱れた性行動の背景の一つには、行動を規制する親の監督が不十分であったことがあるという (Frazier 1932: 199-201)。つまり、母親が出稼ぎに行って昼間家にいないというのが原因の一つであるという。第三ゾーンに住むある非行少年の父親は非熟練業に就いており、そして母親は日中仕事をしていた。日中にはほとんど父親も母親もいないので、親子の間で共通の関心をはぐくみ、共通の経験を共有することが不十分になるとフレイジアは指摘している。

4 社会心理学——状況の定義と生活の図式化

シカゴ学派社会学のなかに「社会心理学」の分野を確立させたのは、W. I. トマスであると言われている (藤澤 2001)⁽⁸⁾。フレイジアもまた、社会レベルと個人レベルの双方に

において、いかに状況を定義し、解体から再組織化へと向かっていくかについて考察している。たしかにフレイジアがシカゴ大学で博士号取得のコースを開始したとき、すでにトマスはシカゴ大学を去っていた⁽⁹⁾。だがフレイジアもふくめその後のシカゴ学派の研究者に大きな影響力を持ちつづけていた (cf. Platt 1991: 87)。フレイジアは、南部から都市に移住した黒人がいかに状況を定義し、生活を図式化しようとしたかという社会心理学的な側面についても描いている。それについて順に見ていくことにする。

人生の「意味」

フレイジアは、都市生活が人々の生活（人生）の「意味」に与える影響を考察しようとする。黒人たちは南部の農村では、自分の所属するコミュニティのなかで特定の地位を占め、友人とのつながりを保っていた (Frazier 1932: 74-80)。だが、彼らは都市へ移動することでそのような地位やつながりを失ってしまう危機にあった。都市では、共同体のコントロールから解放される一方で、都市生活のフォーマルでインパーソナルな人間関係のなかで寂しさを感じることも多かった。また、衝動的に放浪したり、押さえられない欲望に身を任せて犯罪に手を染める者も多かった。そして最初は魅力的であると感じていたはずのシカゴに幻滅していく者も多かった。友人や家族と離れ離れになって感じる幻滅は、「ブルース (blues)」の主題としてもあらわれている。そのブルースの多くには、都市に圧倒されるなかで忘れてしまった家族の親密なつながりへ立ち返ろうとする心意気もあらわれている。このようにして黒人たちは都市生活の幻滅と解体を経験する。やがて、黒人は生活に対して新しい考えを持つようになる。奴隷制の時代から黒人のあいだに存在してきた古い伝統的な考えは消え去っていったのである。

南部の田舎と都市における「意味」の違いの例として、フレイジアの考察する私生児の事例から「結婚」の意味するものについて見てみよう (Frazier 1932: 189-90)。私生児を産んだ未婚女性のほとんどは、婚前の性関係などありふれていた南部の田舎からやっていた。しかし婚前の性関係をもつことは、単調な田舎のコミュニティにおいては、異なった「意味」を持っていた。というのは、南部のほとんどのコミュニティにおいて、性関係を持つということは「結婚」を意味していた。たとえ「結婚」ということにはなくとも、できた子どもは家族集団の一員になったのである。一方、都市における「結婚」と

⁽⁸⁾ 「状況の定義」概念を中心にして、社会レベルと個人レベルの双方における解体と再組織化をめぐる概念間関係については、藤澤 (2001: 97) の図を参照。

⁽⁹⁾ トマスがシカゴ大学を去ったのは1918年であり、フレイジアがシカゴ大学にやってきたのは1927年である。

は、フォーマルな法手続きを踏むことによって初めて成立する。当時、私生児を産むことは「逸脱」とされていたため、家族における愛情面では問題がなかったものの、逮捕を逃れるために「結婚」をしたケースもあった（Frazier 1932：190-3）⁽¹⁰⁾。

パーソナリティ

かつてH. ブルーマーはトマスとズナニエツキの『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』の評価をおこなうなかで、社会的パーソナリティ論を構築することは、社会心理学が果たすべき一つの重要な目的であると述べている（Blumer 1939[1979]=1983：201）⁽¹¹⁾。ブルーマーによれば、『ポーランド農民』におけるパーソナリティの図式は、「トマスとズナニエツキが変動と再組織化の過程にある社会に適した社会理論の類型を開発すると宣言した意図に、よく適っている」という（Blumer 1939[1979]=1983：207）。なぜならば、トマスらのパーソナリティ論は、個人と集団との相互作用をあらわす図式が見られるからである。ブルーマーは次のように述べている。

社会生活は進行中の過程と考えられる。パーソナリティは、この生活の変化（movement）という観点で眺められる。それは動態的な次元でなされる。つまり、個人は、行動するために組織化の特性を自分の環境から絶えず選択する仕事に携わらなければならない。こうした特性の中で、彼の仲間たちの要請や規則が第一義的な重要性を持つ。それらを規定することが彼に一連の図式や態度の組を生ぜしめる。（Blumer 1939[1979]=1983：206）

それではフレイジアが描いている、都市にすむ黒人のパーソナリティについて見ていこう。トマスのパーソナリティ論について言及していることから分かるように、フレイジアはトマスのパーソナリティ論における個人と集団との相互作用の考えを生かしている。人々の「意味」は、人々のパーソナリティを形成し、またそのパーソナリティが人々に

⁽¹⁰⁾ フレイジアは家族遺棄からも生活の意味について探ろうとしている。それに際して、裁判所に残っている家族遺棄のケース記録だけでは、人々の生活、態度、願い、そして人生に対する考えについて知ることはできないと考えた（Frazier 1932：164-5）。そこでフレイジアは個人的ドキュメントないしケースヒストリー法を用いて分析していくのである。

⁽¹¹⁾ シカゴ学派の流れのなかで社会心理学について扱った人物にゴフマンがいる。ただし、ゴフマンによれば、『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』は、ゴフマン自身よりもブルーマーへの影響のほうが強かったと指摘している（Verhoeven 1993：321）。ゴフマン自身は、パークやヒューズからの影響を認めているが、トマスやブルーマーからの影響については（彼らからの引用をおこなっているにもかかわらず）あまり認めていない。ゴフマンの指摘をどのようにとらえるかにもよるが、シカゴ学派のなかでも、ミード、パークからブルーマーへの社会心理学の系譜と、パークからヒューズ、ゴフマンへと流れる社会心理学の系譜の違いについても一つの課題となりうる。

「意味」を与えたのである。

シカゴ学派の一つの伝統として、「マージナルなもの」に目を向けるという視点がある(Plummer 1983=1991: 87-9)。初期シカゴ学派のエスニシティ研究について概観したS. パーソンズが指摘するように、フレイジアはパークのエスニック・サイクル(競争・闘争・応化・同化)を念頭に置きながらも、「社会的同化」されつくされることのない黒人を描き出した(Persons, S. 1987: 106)⁽¹²⁾。このようなマージナルな立場にいる人々について見てみよう。

たしかにフレイジアによれば、都市の黒人のパーソナリティには、奇妙な変化が起っていたという(Frazier 1932: 83-4)。たとえば、ミシシッピーからシカゴにやってきたムラートの女性は、たとえ南部の同郷出身者でも、黒人が彼女を訪ねてくるのは嫌だと話している。また彼女の夫は、北部では経済的な理由から白人として生活していて、南部では有色人種の仲間とかかわりを持っていた。南部からやってきた黒人たちは、シカゴのような大都市の見知らぬ匿名の世界で生き残り、居場所を見つけようと努力した。そのなかで彼らは、マージナルで奇妙な役割を担わされたのである。

もうすこし逸脱論にひきつけた事例を見てみよう。次に取り上げるのは、社会事業所も裁判所もあまり注目しなかった一つの例外的なケースである(Frazier 1932: 176-7)。そのケースのある若い男は、教養があり、文化的背景を持った家族の出身であった。さらに大学の友愛会やその他黒人コミュニティの組織で高い地位を得ていた。彼は突然、子ども一人と妊娠中の妻を残して姿を消してしまったのである。そのコミュニティはショックを受けた。そして誰も彼が遺棄をはたらいたのだとは信じたがらなかった。彼が消え去ったのは悪意あつてのことかそれとも単なる事故か、綿密な調査が行われた。だが、彼は遺棄に向けてかなりの準備をしていたということでその調査は幕を閉じた。同時に彼は白人として「パス」していた職場だけでなく白人集団ともかなりつながりを持っていたことが分かった。彼は肌の色が白かったために、黒人の世界と白人の世界という二つの違った世界を自由に行き来することができた。そのおかげでどちらの道徳的拘束も受けることなく、一方から一方へと好きなように逃げる事が出来たのである。彼が黒人集団と持っていた関係は、放浪人もしくはストレンジャーの関係そのものであった。彼は、慣習や敬虔さ、そして慣例などによる拘束を受けていなかったのだと言える。

また、古い世代の黒人たちは、自分たちの集団の道徳的ないし文化的利益を注意しながら

⁽¹²⁾ 吉田・寺岡(1997: 112)で指摘されているように、パークのエスニックサイクルにおける「同化」の概念については十分な検討が必要である。

ら守ってきた (Frazier 1932: 83-4)。だが、彼らの子どもたちは、シニカルにこれらの価値を清教徒主義的であるとか、もしくはフィリスティンであると呼んでいた。古い世代の黒人たちが聖なるものと見なしていたものに対する愛着 (sentimental attachment) が無くなっていくことは、知的なもしくは芸術的な伝統の始まりをあらわしていたことも多かった。つまり、都市の世界とは、伝統の創造者であると同時に破壊者でもあったのである。すでに指摘されてきているように、古い規準からの逸脱は、社会生活の変動の契機となりうる (cf. 宝月 1990: 274-5)。

都市における合理化

ジンメル都市論以来、都市で生活する人々が「合理的」に物事を考える傾向にあることは指摘されてきた。こうした都市論では、都市における人々の傾向は、都市以外の小さな共同体における人々の傾向と対比される。

フレイジアの場合、都市と対比される都市以外の小さな共同体とは、多くの黒人がもと生活していた南部の田舎のコミュニティにあたる。南部の田舎のコミュニティでは、人々の行動は多かれ少なかれ教会や結社 (lodges) によってコントロールされていた。そして善悪にかんする考えもコミュニティの慣習によって決められていた。だが、都市に移住後、単調なありきたりの生活から解放されるようになり、そして葛藤する規準や都市の変容する行動様式と接触するにつれ、自分の行動について考え始めるようになる。そして、行動は「合理化 (rationalization)」されるのである。それは伝統的な善悪の考えとは矛盾するものであった (Frazier 1932: 166)。

そのような例として、テキサス生まれで、シカゴにやってきてから夫に遺棄されたある女性について見てみよう (Frazier 1932: 166-8)。その女性は夫から遺棄され、シカゴで自分は一人ぼっちだと気づいたとき、「彼氏」を作ることで、W. I. トマスの言う「応答を求める願望 (wish for response)」を満たそうとした。そうしてできた彼氏と親しくなった。「彼は清廉かつ正直な紳士で、女性の扱い方を知っています。もしそうでなかったら、彼と何もかわりをもつことはなかったでしょう」と彼女は話す。そして、次第に通常からは外れた性関係を持つようになった。このことを彼女は隠したがった。しかし彼女は、自分自身に対しては自分の行動を合理化し、正当化しようとした。たしかに彼女は離婚を認めることはできなかった。そして金のために自分自身を売るなどとんでもないことであった。彼女は「そのように育てられて」はいない。「私は真面目な女の子として育てられました」と語る。しかしながら、愛する「きちんとした」男と性関係を持つのはまた別であると考えようとした。それが果たして正しいのか間違っているのか彼女自身は分からな

かった。だが彼女は「合理化」を行った。「こんな古い諺があります。『操行の良い二人はお互いを汚さず (Two clean sheets cannot dirty each other up.)』って。もし二人は愛し合っているならば、誰でも自分たちの思うようにできる権利があるのです」と、彼女はこう話すにまで至った。

願 望

トマスは『不適応少女』(1923)のなかで、「4つの願望」として知られる有名な概念を定式化した。その4つの願望とは、「新しい経験を求める欲求」、「安全を求める欲求」、「応答を求める欲求」、「認知を求める欲求」である (Thomas 1923: 4)。これらはトマスによれば、「社会の中に自分が受け入れられて初めて満たされるような多種多様な願望」の一般的なパターンである (Thomas & Znaniecki [1918-20]1974: 72=1983: 67)⁽¹³⁾。

フレイジアのシカゴ学派に「社会化」される上で「重要な他者」となったパークは、「社会的実験室としての都市」(1929)論文において、以下のように述べている。

都市の自由の中では、どんなに風変わりであろうとあらゆる個人が、各自の個性を伸ばしてそれを何らかの形で表現できる環境を、どこかで見つけ出す。もっと小さな小さなコミュニティでも異常さが許容されることが時にはあろうが、都市の場合、それが報酬をもたらすことさえしばしばある。あらゆる種類の個人——天才ばかりでなく犯罪者や浮浪者もまた——がどこかで気の合った仲間を見つけて出せること、しかも家族のような親密な交際圏内や小コミュニティの狭い領域内では抑圧された願望が、残らずどこかで表現されることになる。ありとあらゆる形をとって現れる人間の本性を、都市は強化し伝播し宣伝する。都市がおもしろいものになったり、また時に魅惑的にさえなるのは、まさにこれらのおかげなのだ。しかし他方、都市が他のどこにもまして、人間の心の秘密を発見するのにふさわしい場所であり、それゆえ人間の本性や社会を研究するのにふさわしい場所であるのも、このためである。(Park 1929=1986: 35)

フレイジアはシカゴサウスサイド黒人コミュニティを「自然地域」としてとらえ、そこに立ち現れる「人間性」についても描こうとした。その一例として、先ほどのテキサス生まれで、シカゴにやってきてから夫に遺棄されたある女性が「応答を求める願望」を持つようになったプロセスについてもう少し詳しく見てみよう (Frazier 1932: 166-8)。その

⁽¹³⁾ 『ポーランド農民』の第一部においては、3つ目の欲求は「支配を求める欲求」となっていた。『不適応少女』においては、「支配を求める欲求」のかわりに「応答を求める欲求」が定式化されている (cf. 藤澤 1997: 170)

女性話を聞くと、彼女の母親もまた遺棄されていたのである。母親が亡くなった後も、自分が聖歌隊に属していた教会とかかわりをもち続けた。彼女は、前妻をきちんと扶養したことで知られていたやもめの男と結婚した。そのため、彼女は働かずにすんだ。夫となったその男は食堂車のウェイターで、やはりよき扶養者となってくれた。だが、「どの女も彼には充分ではなかった」。彼は一度に何週間も家を空け始め、ついには彼はシカゴのどこかに消えてしまった。それで彼女は自分の生計をどのように立てたらよいか考えなければならなかった。そして彼女はとあるホテルに職を見つけた。しかしその客の男たちは立居振舞いから話す言葉から何から何まで「ひどい」ものであった。彼女は自分の生活が抑圧されるのを感じた。そして彼女はその職場を立ち去った。後に、彼女は別の場所で職を見つけることになる。しかし、また同じような理由で職をやめざるを得なかった。さらに、だんだんと、彼女は教会とかかわりを失っていく。なぜなら他のメンバーと同じくらいきちんとした服装ができなくなり、会費も払えなくなったからである。彼女は次のように話している。「2、3週間前、通りで牧師に会いました。彼は、たとえおさめるお金がないにしても、教会に来なくてははいけませんよ、と言いました。ですが、私はお金もおさめられないのに行くのは嫌なのです」。このようなプロセスの後、彼女は寂しさをつのらせることになる。彼女は空虚な都市で自分は一人ぼっちだと気づいたとき、「彼氏」を作ることで「応答を求める願望 (wish for response)」を満たそうとしたのである。そうしてできた彼氏と親しくなり、因襲から外れた性関係についても「合理化」をおこなっていったのである。

5 文化学習論

文化学習論は、「逸脱は学習される」ととらえるものである。そして犯罪者が適法行動よりも違法行動に同調すれば報酬を与える社会システムに組み込まれているとする (LaFree 1998=2002: 96)。この文化学習論の考え方は、スラッシャーの『ギャング』(1927) やショウの『ジャック・ローラー』(1930) にも見られる。この理論はその後、差別的接触論 (differential association theory) としてサザランド (Edwin Hardin Sutherland) やドナルド・クレッシー (Donald Ray Cressey) (とさらにその弟子たち) によって展開されていくことになる。

フレイジアによれば、逸脱の学習は、コミュニティ内の安定した地域よりも解体地域のほうがより容易になされた。解体地域の逸脱少年はギャング集団とかかわったり、両親の犯罪を見て育ったりした。また、都市では活字の読み物が、性行動に影響を与えることも

あった。それではこれらについて順に見ていくことにしよう。

解体地域における逸脱パターン

すでに見てきたように、少年非行が集中していたのは、黒人コミュニティのなかでも退廃と社会解体が進んでいた地域である。黒人集団のなかでも特に慣習による社会的コントロールが衰退している傾向にあったこれらの地域では、とりわけ多くのいわゆる「欠損家庭」において家族の規律が見られなかった（Frazier 1932：211-2）。そして比較的良好に組織化された家族ですら、子どもたちの行動を拘束する力の多くを喪失していた。多くの少年は他の少年やギャングからこれらの地域の特徴であった非行行動のパターンの影響を受けていた。多くの黒人が住まわざるを得なくなった地区で「伝統」となってしまった、良からぬ非行の行動パターンは、安定した家族にも影響を与えることが多かった。伝統あるよき家族に生まれたある黒人のソーシャルワーカーは、そのコミュニティが妹たちに与えた悪徳的行動の影響について次のように語っている。彼女の妹のうち一人は実際に非行に走った。

私たちの近隣の人口密度がより高くなり始めたとき、白人の遊び人たちの「歓楽街」として知られるようになりました。都市が膨張していくにつれ、その人々はより遠方へと押しやられていきました。それが都市の縁にまで達したとき、彼らはこの近所に住むことが容認されました。私の母が外出しているとき、私の妹たちは売春婦のような格好をして、タバコを吸い、さらに毒づいたりして売春婦の言葉を真似しようとさえしていました。（Frazier 1932：212）

さらに、退廃地区の少女たちは、「逸脱した」性行動にかんする知識を容易に学び得る環境にいたとフレイジアは指摘する。未婚の母となったあるテネシー生まれの少女の例を見てみよう（Frazier 1932：194-8）。その少女の話を見ていくと、その場所の近隣の様子をいくらか知ることができるのである。彼女はテネシーで生まれ、しばらくセントルイスで過ごした後、シカゴに6年間住んだ。彼女は髪が長かったため、セントルイスでは彼女はインディアン系の血が流れていると考えられていた。彼女は弱冠4歳のときにもうステージで踊っていた。シカゴにやってきてからも、彼女はサウスサイドの安劇場で踊りつづけた。シカゴでは29番ディアボーンに住んでいた。だがそこは「今まで見た中で最悪の場所」だと彼女は言う。学校に通う子どもたちはナイフや銃を持ち歩いていた。彼女も毎日のように男につけまわされた。彼女も父親も襲われて金を奪い取られた。小さな子どももよく殺されていた。そして彼女には義理の「いとこ」がいた。彼女はそのいとこを自分の弟や

妹以上にかわいがった。彼女はこのいとこの住まいで「男友達」と出会った。その家は第三ゾーンの端の方にあった。だがそのいとこの住まいのある建物は「ひどい」ものであった。そこは女性の同性愛者のたまり場で、売春も行われ、夜はかなり騒々しかった。このような環境に育ったために、この14歳の早熟な未婚の母親は、アブノーマルなセックスやその他悪徳にかんする知識が豊富であった。このことはこの地域の道徳的退廃の度を反映していた。そしてこの未婚の母になるという経験は、この地域の特徴と並行してさらなる退廃への前奏曲にすぎないこともしばしばであったのである。

ギャング集団

退廃地域においては、地域や親のコントロールが十分に働いていなかった。そのため、何らかの逸脱パターンは容易に引き継がれていった。ある非行少年の家族がシカゴで住んでいた地域は、長い間、悪徳と犯罪がその特徴であった（Frazier 1932：215-6）。その地域はかなり衰退しており、この地域の黒人のほとんどは安アパート、荒廃した共同住宅、ないしは木造の建物に住んでいた。この家族がシカゴに住んでいた5年とちょっとの間に、同じ地域内で彼らは4回も引越しをした。引越しのたびに少年は転校を強いられることになった。この地域の家族の大きな特徴は、何度も引越しを繰り返すことであった。魅力的な家庭環境とは程遠く、少年たちはほとんどの時間をストリートで過ごした。すでに見てきたように、この地域はあらゆる形態の近隣組織や共同生活を欠いていた。少年は最初、遊び仲間の一員になった。後にその地域の組織化されたギャングに加入し、これらの集団の特徴となっている非行行動のパターンを引き継いでいった。少年の母親も、少年をギャング集団から身を引かせることはできなかった。次のように話している。

一緒に駆け巡る一団の少年たちがいて、私たちは息子を彼らから脱退させることはできないのです。彼が言うには、G-C-団には誰もが尊敬する統率者がいるということです。息子のM-の話では、その統率者は手下を従えて店に行くのです。そして店員のところに行って話しているすきに、手下たちは好きなものを万引きするのです。それがうちの息子が入っている一団で、すぐに彼にやめさせるのは容易ではありません。（Frazier 1932：216）

両親の逸脱パターン

悪徳と犯罪で満ちていた第三ゾーンでは、少年非行はこの地域の特徴であった犯罪行動ばかりでなく、家庭内の両親の犯罪行為を反映していることもあった。ある10歳の少年のケースを見てみよう（Frazier 1932：216）。彼は「母親の手に余る」という理由で、1924

年に初めて母親によって裁判所に連れてこられた。その約1年前には、少年の義理の祖母が少年の母親を、少年の扶養放棄と反道徳的行為を理由に裁判所に訴えていた。1924年に少年の不登校、さらに家族遺棄の結果として、少年は問題児収容施設（parental school）に拘留された。1927年、少年が13歳のとき、窃盗のかどで裁判所に告訴された。この少年は以前にも、仲間三人と数回にわたって非行行動をおこない、2回クック郡立少年院（Cook County School）に、さらに何度かシカゴ問題児収容施設に拘留されたことがあった。

フレイジアは続けて、少年の家族背景について見ていく（Frazier 1932：216-7）。その短い事実の物語を見ていくと、少年の非行、そして後の犯罪キャリアが、彼の母親と義理の父親の行動に影響され展開されてきた様子を知ることができる。少年の父親と母親は1911年にニューオーリンズで結婚し、そして1913年にシカゴにやってきた。翌年にその少年は生まれた。家族が都市に移住してすぐに、父親は建設会社に職を得た。父親が病気になったとき、母親は洗濯とアイロンがけなど昼間仕事をするようになった。母親は少年を彼の育ての祖母に預けた。父親が病気から回復すると、祖母は子どもの扶養のために10ドルを彼が支払うように求め、そして裁判所命令を得た。しかし父親は家族に対する責任を果たそうとせず、シカゴから立ち去ってしまった。1923年、父親は療養所に送られる。そして家族に一銭も残すことなく3月に亡くなった。その次の年、母親は再婚した。彼女は自分で仕事をせざるを得なくなってもなく、麻薬を売ったり、その他の犯罪行動に走るようになった。彼女にしてみれば、それほど手間をかけることなく、より多くの金を手に入れることができる手段を見つけたのだと言える。彼女は、警察の規制により麻薬取引ができなくなったとき、警察から逃れるために全国を転々とした。だがその後ついにシカゴで逮捕された。しかし彼女の話によれば、多額の金を払うことで投獄されるのを逃れた。それから彼女は酒を売り始めた。だがこれもまた警察の規制でやめざるを得なくなった。そして次に彼女は「ポリシー（policy）」を売り始めた。ポリシーとは、黒人コミュニティのいくつかの地区で人気のあったくじのことであった。少年もポリシーを売る母親を助けることで、母親の犯罪にかかわっていった。母親は、少年が大きくなって犯罪をうまくやり逃げ、捜査の目を逃れるようになるまで待とうと考えていたのであった。

活 字

さらには、都市では出版物がとても重要な役目を果たしていた（Frazier 1932: 198-9）。読み物は、彼女らにとってセックスの知識を得るのに役に立っていたのである。たとえば『ラブストーリー（Love Stories）』、『本当の話（True Stories）』、『情事（Love Affairs）』、

『真実の告白 (True Confessions)』そして『おとぎ話 (Fairy Tales)』という雑誌を読んでいたという少女の言うことは他の少女とも共通していた。ある少女が自分の生活史を語る際、これらの雑誌の一つに載っていた、未婚の母とその子どもに焦点を当てたあるストーリーを思い起こしていたのは特筆すべきことであるとフレイジアは言う。

6 まとめ

以上のようにフレイジアは、人間生態学と個人的ドキュメントの方法を用いながら、黒人コミュニティにおける「逸脱論」を展開している。人間生態学と個人的ドキュメントという2つの方法は、逸脱論における社会解体論、(トマス流の)社会心理学、文化学習論という理論へと生かされていったととらえることができるのである。これらの視点は相互補完的である(たとえば、フレイジアにしたがえば、解体が進んだ地域では、逸脱が学習されやすい心理を産みやすいと言い得る)。これらの視点には、フレイジアが社会化された「シカゴ学派」のハビトゥスがよくあらわれていると言える⁽¹⁴⁾。

ところでフレイジアが述べているいくつかの逸脱の背景は厳密な形で実証されているわけではない。そして理論自体もそれほど洗練されているものではないかもしれない。しかも、「親密圏」と呼ばれるものが多様化した現在の社会、そして構築主義の洗礼を受けてきた現在の家族論からすれば、いささか単純な議論に見えるかもしれない。つまり、「ふつうの家族」像を設定し、「私生児」、「未婚の母」、「家族遺棄」などを「逸脱」現象として扱い、これらの現象を社会解体の度合いを表す指標として用いていることにかんしては現代の視点からすると議論の余地があるかもしれない。さらには、「黒人」社会学者が、黒人の「逸脱」について語ることはどのような意味を持っていたのであろうか。

フレイジアがシカゴ大学で学んだ当時には、「黒人」の研究者はフレイジアのほかに、チャールズ・S・ジョンソン、ウィリアム・O・ブラウン、バートラム・W・ドイルといった人々がいた。黒人は「友達」であると考えていたパークの指導のもと、そこには「研究を行うにふさわしい学問的雰囲気」が漂っていたという(Persons, S. 1987: 111)。黒人の研究者とはみな「社会改良主義」者であるというイメージを打破するためにも、当時のシカゴ大学で広がっていた「科学主義」は、フレイジアにとって好都合であった。さらに、黒人たちのアメリカでの「逸脱」行動には、アフリカ時代の影響(つまり固有の人種

⁽¹⁴⁾ フレイジアはパークに対してまったく違和感を覚えたことがなかったわけではないにせよ(Hall 2002: 57)、「パークの最良の学生」と言われていた(Edwards 1968: xvi; Persons, S. 1987: 74)。

としての影響)はないのだというパークの考え、さらにその考えをもとにショウらが展開した研究は、フレイジアにとって黒人に対するイメージを打破する上でかなり役立つものであったのである (cf. Platt 1991: 137)。パークらの人間生態学による視点で、黒人コミュニティで起こっている「分化」を説き、貧困黒人の解体ないし「逸脱」の様子と同時に、上層黒人の組織化の様子をクローズアップさせる手法は、保守志向であると指摘できるかもしれない。しかしそれらは、黒人大衆、そして黒人である自分に対するイメージへの、あくなき挑戦であったととらえられるのである。

もちろんモノグラフの妥当性を、その著者の社会的背景から判断することはできない。しかし、著者の社会的背景は、そのモノグラフとそこで展開されている議論を理解する上で重要なものとなる。リュック・ボルタンスキー (Luc Boltanski) は次のような言葉を残している。「科学論文にも、文学作品同様、つねに著者の社会的軌跡の痕跡が留められている」と (Winkin 1988=1999: 15)。「シカゴ学派」に対する思い入れは、フレイジア自身の挑戦のあらわれであったのかもしれない。

参考文献

- American National Biography*. V.8., 1999, Oxford University Press, 420-1.
- Blumer, H., [1939] 1979, *Critique of Research in the Social Sciences: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's The Polish Peasant in Europe and America*, Transaction Books. (= 1983, 桜井厚部分訳『生活史の社会学』御茶の水書房.)
- Burgess, E. W., 1925, "The Growth of the City: An Introduction to a Research Report," Robert E. Park and Ernest W. Burgess and Roderick D. McKenzie, *The City*, University of Chicago Press. (= 1972, 大道安次郎・倉田和四生訳『都市』鹿島出版会.)
- , 1932, "Editor's Preface," E. F. Frazier, *The Negro Family in Chicago*, University of Chicago Press, ix-xii.
- Durkheim, Emile, [1897]1952, *Suicide: A Study in Sociology*; translated by John A. Spaulding and George Simpson; Edited with an Introduction by George Simpson, Routledge & Kegan Paul.
- Easthope, Gary, 1974, *A History of Social Research Methods*, Longman Group Limited. (= 1982, 川合隆男・霜野寿亮監訳『社会調査方法史』慶應通信.)
- Edwards, G., Franklin, 1968, "Introduction," Frazier, Edward, Franklin edited and with an introduction by G. Franklin Edwards, 1968, *On Race Relations: Selected Writings*, University of Chicago Press, vii-xx.
- , 1974, "E. FRANKLIN FRAZIER," Blackwell, James E. and Morris Janowitz eds., *Black Sociologist: Historical and Contemporary Perspectives*, University of Chicago Press, 85-117.
- , 1980, "E. Franklin Frazier Race, Education, and Community," Robert K. Merton and Matilda White Riley eds., *Sociological Traditions from Generation to Generation: Glimpses of the American Experience*, Ablex Publishing Corporation, 109-29.
- Frazier, Edward Franklin, 1931, "The Negro Family in Chicago," A Dissertation Submitted to the

- Graduate Faculty in Candidacy for the Degree of Doctor of Philosophy, Department of Sociology, University of Chicago.
- , 1932, *The Negro Family in Chicago*, University of Chicago Press.
- , 1968, "The Negro Family in Chicago 1964," Frazier, Edward, Franklin edited and with an introduction by G. Franklin Edwards, 1968, *On Race Relations: Selected Writings*, University of Chicago Press, 119-41.
- 藤澤三佳, 1997, 「社会と個人 —— その解体と組織化」宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣, 133-70.
- , 2001, 「ウィリアム・アイザック・トマスと『社会心理学』の形成」中野正大編『シカゴ学派的総合的研究』1998-2000年度科学研究費補助金[基盤研究(B)(1)]研究成果報告書[課題番号10410045], 87-100.
- Glazer, Nathan, 1966, "Forward," Edward Franklin Frazier *The Negro Family in the United States*, University of Chicago Press, vii-xviii.
- Hall, Robert L., 2002, "E. Franklin Frazier and the Chicago School of Sociology: A Study in the Sociology of Knowledge," James E. Teele ed., *E. Franklin Frazier and Black Bourgeoisie*, University of Missouri Press, 47-67.
- 宝月誠, 1990, 「逸脱論の研究」恒星社厚生閣.
- LaFree, Gary, 1998, *Losing Legitimacy: Street Crime and Decline of Social Institutions in America*, Westview Press. (= 2002, 宝月誠監訳・大山小夜・平井順・高橋克紀訳『正統性の喪失 —— アメリカの街頭犯罪と社会制度の衰退』東信堂.)
- Moyer, Imogene L., 2001, *Criminological Theories: Traditional and Nontraditional Voices and Themes*, Sage Publications.
- 中野正大・西川知享, 2002・2003, 「シカゴ学派におけるエスニシティ研究(上)(下) —— E・フランクリン・フレイジア『シカゴの黒人家族』」『人文』第50号, 京都工芸繊維大学工芸学部, 13-51(上). (下は近刊)
- Odum, H. W., 1951, *American Sociology: The Study of Sociology in the United States through 1950*, Longmans. (= 1955, 横越英一訳『アメリカ社会学』法政大学出版局.)
- Park, Robert Ezra, 1929, "The City as Social Laboratory," T.V. Smith and L.D. White eds., *Chicago: An Experiment in Social Science Research*, University of Chicago Press, 1-19. (= 1986, 町村敬志・好井裕明訳『実験室としての都市』御茶の水書房, 11-35.)
- Persons, Stow, 1987, *Ethnic Studies at Chicago 1905-45*, University of Illinois Press.
- Platt, Anthony, 1991, *E. Franklin Frazier Reconsidered*, Rutgers University Press.
- Plummer, K., 1983, *Documents of Life*, George Allen & Unwin. (= 1991, 原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳『生活記録の社会学 —— 方法としての生活史研究案内』光生館.)
- Quinn, James A., 1940, "Topical Summary of Current Literature on Human Ecology," *American Journal of Sociology*, 46(2): 191-226.
- Thomas, William I., [1923] 1969, *The Unadjusted Girl: With Cases and Standpoint for Behavior Analysis*, Patterson Smith.
- Thomas, William I. and Florian Znaniecki, [1918-20] 1974, *The Polish Peasant in Europe and America*, Octagon Books. (= 1983, 桜井厚部分訳『生活史の社会学』御茶の水書房.)
- Verhoeven, Jef C., 1993, "An Interview with Erving Goffman, 1980," *Research on Language and Social Interaction*, 26(3): 317-48.
- Winkin, Y., 1988, *Erving Goffman: Les Moments et Leurs Hommes*, Paris, Seuil/Minuit. (= 1999, 石黒毅訳『アーヴィング・ゴッフマン』せりか書房.)
- 吉田竜司・寺岡伸悟, 1997, 「シカゴ学派のマニフェスト —— ロバート・E・パーク、アーネスト・W・バージェス『科学としての社会学入門』宝月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣, 95-130.

(にしかわ ともゆき・博士後期課程)

E. F. Frazier's Theory of Deviance

Tomoyuki NISHIKAWA

This paper seeks to reveal E. F. Frazier's theory of deviance. Though Frazier's works are rarely found in recent criminological theory texts, Frazier, as some researchers have mentioned, made many significant contributions to criminology and to sociology in general.

Frazier, who was an African-American sociologist, was trained at the University of Chicago at the time of its "Golden Age." Under the influence of prominent teachers he was trained in the Chicago School of Sociology, and received a doctoral degree in Sociology at the University of Chicago in 1931. *The Negro Family in Chicago* is based on his doctoral dissertation. Frazier used ecological analysis and personal documents, which are two methodological tools of the early Chicago School, to study the "Negro" Family.

We have found that Frazier's theory of deviance contain the perspectives of social disorganization, social psychology, and social learning of deviance. Regarding social organization, we examine deteriorate areas, mobility, and loss of parental control. As for his social psychology, we examine the meanings of life, personality, and rationalization. In the perspective of social leaning of deviance, we examine the pattern of deviance, the gang, the influence of parents, and reading materials. These perspectives are traditions of the Chicago School. Though some of the methods Frazier applied seem a bit naïve by the standards of modern sociology, Frazier's theories of deviance contain many significant sociological resources. Following the sociological attitude of R. E. Park, Frazier studied the "Negro" Family not from a "social problems" approach, but from a "sociological" approach, which presents a scientific and fruitful analysis. Recognizing that a systematic study of the Negro family did not exist, he tried to give authentic information on Negro life.